

## 研究

土倉ゼミ

Research

目を凝らし、耳を澄まし、フィールドに学ぶ—  
人びとのいとなみに迫る社会心理学社会学科  
土倉英志 准教授

私は社会心理学の立場から、人びとがさまざまな活動をしている現場（フィールド）に足を運んでいます。近年は人びとの居場所やつながりに関心をもち、コミュニティカフェと呼ばれる場所にお邪魔しています。フィールドに足を運んで観察したり、インタビューしたりする研究手法はフィールド研究と呼ばれており、実験や質問紙調査と並ぶ、社会心理学の大切な研究手法のひとつです。

そもそも社会心理学とはどのような学問なのでしょう。じつは社会心理学に関心をもっている私にも簡単には応えることができません。いいえ、関心をもっているからこそ、応えるのが難しいと言うべきかもしれません。

会ったこともない人の行為について「善い」や「悪い」を言い立ててみたり、ものごとをスパッと一刀両断したり、こうしたふるまいに知性をみてとることが、もしかしたらあるかもしれません。社会心理学では、人の「認知的節約家」としての側面が明らかにされてきました。じっくり考えるのは頭が疲れるので、手っ取り早く手ごろな結論を出そうとしてしまうのです。他方で、対象について知れば知るほど、その姿が複雑で多面的であると気づくことも私たちは経験しています。

かつて、思考することを、深く海に潜ることにたとえた哲学者がいました。海に深く潜っていくには、大きく息を吸い込んで、長いあいだ潜水していることが求められます。深く潜った先でのみ、目にすることのできる光景があり、手にすることのできるものがある。体力やスキルがなければそれも叶いません。経験を積むことでこそしずつ深く潜れるようになるのです。深く思考するには、それに見合う経験が求められると言えるでしょう。

私が取り組んでいるフィールド研究にもおなじようなことが言えます。人びとがフィールドで成しとげていることが、ちょっと見聞きしただけで「わかる」なんてことはありません。人があたりまえのように過ごしている日常は、それまでの歴史を通じてすこしずつ築きあげられたもので、まるで複雑にからまりあった糸のようです。それを理解しようとするとは、糸を解きほぐすことになぞらえることができます。ところが複雑なものごとにつきあったり、それを言葉にするのは簡単ではありません。我慢がきかないと、糸をぶつんと断ち切るようなことになってしまいます。そうしてものごとを単純化し、わかったつもりになってしまいます。複雑な現象に、その核心を損なわないように迫るには、相応の知的な体力やスキルのようなものが求められるのです。

フィールドに身を置き、人びとのいとなみに目を凝らし、饒舌には語られない心の声に耳を澄ませます。そうした経験を積み重ねたさきに、ようやく複雑さに開かれることがあります。そのとき目にしているものや耳にした声は、それまでと変わりがなはいはずなのに、もしかしたらすこし違って感じられるかもしれません。

## 学生の声

## 自分や他者を「受け入れる」「許す」心理構造を追求したい

社会学科 3年 土倉ゼミ  
石田鈴さん

社会学部で心理学をテーマにしているのは土倉ゼミのみで、社会心理学についてそれぞれの関心のある研究テーマを自由に選べます。近年、ADHD（注意欠如・多動症）やHSP（ハイリー・センシティブ・パーソン）などの言葉が広がっています。そうした特性で悩んでいる人は、自分のせいではないとわかれば救われることもあり、

その意味では「生きやすい社会」になったともいえます。一方で、救われる人ばかりにフォーカスするのではなく、それによって苦悩する人々に注目してみたいです。さらに自分や他者を「受け入れる」「許す」という心理はどのような構造になっているのかを研究し、誰にとっても「生きやすい社会」をつくることに貢献したいと思っています。